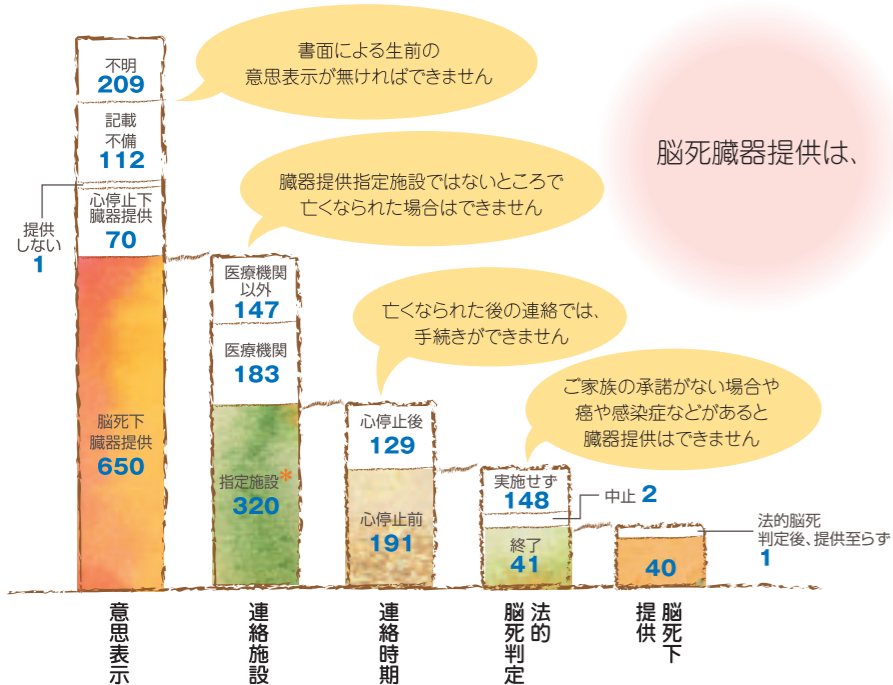


One Point Data

ワンポイント・データ

意思表示カード(シール)が脳死臓器提供につながるまで

亡くなられた方が意思表示カード・シールを持っていたという情報が1,042件寄せられました。(1997年10月~2005年12月)



脳死で臓器を提供する意思を記入しており、臓器提供指定施設に入院した320名のうち、その患者さんの情報が心臓停止前に日本臓器移植ネットワークに連絡されたケースは191件でした。

そのうちご家族が脳死判定と臓器提供に同意し、法的脳死判定が終了したのは41名でした。実際に脳死で臓器を提供されたのは40名でした。

*臓器提供指定施設とは、適正な脳死判定を行う体制があり、救急医療において高度の医療を行う次の施設が指定されています。大学附属病院、日本救急医学会の指導指定施設、日本脳神経外科学会の専門医訓練施設(A項)、救命救急センターとして認定された施設。

臓器移植には、厳しい法律やさまざまな細かいルールがあって、意思を持っていても誰もが臓器提供ができるわけではありませんが、まずは私たち一人ひとりが意思表示カードを持つことが出発点です。意思表示にご協力ください。

詳しくは、<http://www.jotnw.or.jp/datafile/card.html>

新しい意思表示カードが仲間入り。 2枚のカードに書きましょう!

脳死での臓器提供は、本人の意思表示(15歳以上が有効)と家族の同意が必要です。もっと多くの方に持っていただきたくて、2005年10月に新しいデザインのカードを追加しました。従来のカードも有効です。

2枚のカードに自分の意思を書いて、1枚は自分で持ち、もう1枚は家族などに渡して、しっかりと伝え合っておきましょう!



臓器提供に関するお問合せ先

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-5-16 晩翠ビル3階

携帯電話からは

☎0120-78-1069 ☎03-3502-2071



<http://www.jotnw.or.jp> にもさまざまな情報が掲載されています。



JOTNW (社)日本臓器移植ネットワーク

臓器を提供してもよいという人(ドナー)やその家族の意思を生かし、臓器を提供してもらいたいという人(レシピエント)に最善の方法で臓器が贈られるように橋渡しをする日本で唯一の組織です。

●医療機関の皆様へ

臓器提供意思表示カード・シールに臓器提供の意思を表示している患者さんのご家族からカード等の提示や「臓器提供についてコーディネーターの話を聞きたい」とのお申し出がありましたら、下記フリーダイヤルにてお知らせください。

また、心停止後の臓器提供は、意思表示カード等がなくともご家族のお申し出だけでできますので、ご家族にご希望があればお知らせください。

ドナー情報には 24時間対応しております

ドナー情報フリーダイヤル ☎0120-22-0149



臓器提供ご家族の手記

think transplant Vol.3



いいことをね。
7つの宝石が輝いていることを
いつも心の中で思っているから。
私達も頑張って生きていこう。

いのちの贈りもの
～あなたの意思で助かる命～

think transplant Vol.3



23歳

本人の意思を継ぐ…

その思いだけで臓器提供を決定

亡くなった娘は二人姉妹の次女です。長女は金融機関に勤めていて、窓口に意思表示カードを置いていたそうです。次女が病院に運ばれた時、本人がそのカードを持っていることなんて知りませんでした。

主治医から次女の状況が大変厳しくて脳死状態だと聞いた時、長女が言いました。「妹は意思表示カードもっています。」主治医からは、実際にカードがないとだめだという返事。「持ってくる。」妻と長女はカードを取りに家に戻りました。カードにはサインがきちんとしてありました。カードに署名した日は、私の母の3周忌にあたる日だったのです。何か思いがあったのでしょうか。私達家族は話し合いました。「どうしようか。こんなにきちんとして書いてあるんだから意思を叶えてあげようか。」「いいよ。」「叶えてあげましょう。」

私達は、それまで臓器移植について何も知らなかったのです。今までの脳死での臓器提供数を聞いて、その小ささにもびっくりしました。何も知らずに決意した私達には、その後、カードの重み、病院の慌しい状況、マスコミが押し寄せてくることなどまったく想像できませんでした。

娘のからだはまだ温かく、かわいい顔をしていましたが、人工呼吸器によって呼吸をさせられているだけでした。病院に提供の意思を伝えた後の夜中、初めてコーディネーターに会いました。「提供意思に変わりありませんか。」「ありません。」このやり取りを何度重ねたことでしょうか。やるからには、厳しい状況に耐える覚悟があることを家族で確認しあい、気持ちを微動だにせず、しっかりとコーディネーターに返事をしました。

本人の意思を継ぐ…その思いだけで決意しましたが、7人の方に臓器が提供できると聞き、娘という宝石箱から7つの宝石が散っていき、7人の方々の中で輝き生きていく、それでいい、と思いました。

1枚の黄色いカードが家族に与えた勇気と希望。そして多くの人達に与えた感謝名をご紹介します。

家族と医療者が協力、信頼し合うことの大切さ

名前は公表しないで欲しい、クーラーボックスの撮影もやめてください、このような2、3の条件を申し出ました。コーディネーターはしっかり伝えてくれて、実際には守られたのですが、「関東の女性」が脳死で臓器を提供するという情報は、またたくまに『東京の20歳代の女性』というように、細かな内容でほとんどのメディアに流れていました。病院の出入り口はマスコミだらけで、私達の行動は規制され2日間は缶詰状態でした。私達家族はびっくりして「こんなことでいいのだろうか。」と思いながらも、ドラマを見ているような感覚にさえなりました。こんな状況の中、脳死判定の時間、2回目の判定をするまでの6時間、ただひたすら長く感じましたが、静かに待ちました。

コーディネーターは逐一、報告してくれました。肺の状況がとてもいいこと、心臓は大阪の患者さんに渡りそうなこと、何もかも伝えてくれて、それはとても信頼できるものでした。家族と病院とコーディネーターの三者が一体となって、互いに協力し合い、信頼し合うことの大切さを痛切に感じました。

提供が終わってもマスコミが多くて、すぐには娘を家に連れて帰れなかったのので、霊安室に移ることにしました。狭い部屋でしたが、コーディネーターが花を持ってきてくれて、病院で働く百数十人もの方がお線香をあげに来てくれたのです。霊安室にいる多くの方が娘の行為に感銘をしてくれていましたし、私達もその光景に心から感動しました。「いいことをしたね。7つの宝石が輝いていることをいつも心の中で思いながら、私達もこれから頑張って生きていこう。」と。

七つの宝石箱の輝き

肺を移植した人の映像がテレビで放映されたことがあります。一つの命が失われ

るときに、本人のカードと家族の同意によって20年間病に苦しんでいた40歳代の女性をどれだけ輝かせたかを見ることができました。この姿こそ、娘の宝石箱の輝きに値するのです。これほど元気になった姿に私達は感銘しました。娘の宝石箱のひとつ、肺の移植を受けた方からお手紙をいただきました。『大事にします。今はそれしか言葉が見つかりません。生きるという何にも変えがたい尊い贈り物を、私の命と共に歩いてくださる希望をいただきました。大事にします。大切にします。ありがとうございます。』

心臓を移植した方のカードもいただきました。これも私達の宝石箱です。

7人の方々やそのご家族からコーディネーターを通じて情報やお手紙をいただくことが、一番の楽しみです。宝石箱の輝きを確認し、娘の功績を多くの人に喜んでもらっていることに感銘し、そのたびに勇気づけられるのです。娘もきっと喜んでいてでしょう。娘が亡くなって1年経ったとき、肺



10歳



3歳

移植をした方のレントゲンを見せてもらいました。「娘は生きている」と強く感じました。私達は、淋しくありません。7人の方の中で輝き続けているのですから。

厚生労働省から届いた1枚の感謝状には「崇高なる行為に対して」という言葉があり、その行為の気高さを痛切に感じました。娘のお別れ式では、写真の周りにいっぱいの花を飾りました。250人くらいの若い人達が集まって、カーペンターズの曲が流れる中、パーティー形式で見送りました。「娘は立派に生きているので、これは旅立ちなんです。」皆さんにそう伝え、娘を乗せた車が出る時には拍手をしてもらいました。火葬場で真っ白な骨になった時、「いいことしたなあ。」と声をかけてやりました。「何もしなかったら、とても寂しい思いをしたかもしれないのに、7つの宝石を先に取り出しておいてよかったなあ」と。

亡くなってからしばらくして、娘のボーイフレンドが名乗り出てくれました。とてもいい青年だったんです。もらったネックレスを骨壺に入れてあげました。この時のことを思い出すと、とても感傷的になってしまって涙が溢れてしまいます。

意思を継ぐこと、つなげること

小さな黄色いカードが多くの人に感銘を与え、勇気と希望をもたらしました。その大きさは想像を絶するものでした。いまや意思表示カードは親戚も全員持っています。娘の意思を継いで続きたいんです。

脳死での初めての提供があった時も、大変な報道とプレッシャーの中で決意したご家族は「次につなげてください」とおっしゃったそうですね。1回目の提供の勇気は2回目につながったんです。私達も、次の人のために提供しようと思いました。娘が提供した後も続いて、今は四十数名の方が提供しています。

病院の受け皿、考え方、態度、そしてコーディネーターの人間性、信頼性はとても重要です。あの時、院長先生やコーディネーターと真剣に目と目を合わせて話し合い、何度も家族の意思を確認されましたが、娘の意思を継ぐという決意はまったく変わりませんでした。本人の意思を尊重し、大切にしてくれた病院やコーディネーターの協力は感銘に値しました。三者が一体となって大きな力となれば、宝石箱をどれほど輝かせるか、どれほど素晴らしいものにできるかを痛切に感じました。

メッセージ

その後、臓器を提供した家族が集まる機会がありました。いろいろなご家族と会い、当時の話をして再び感動しました。皆、懸命に生きているのです。

1枚のカードが勇気と感銘を与えてくれました。娘に負けないように生きていきます。 父より